

2020年5月24日(日)

上尾合同教会

聖書 エゼキエル書 1章26~28節

ヨハネの黙示録 4章1~5節

説教「黙示録②①—ここへ上って来い」

武田真治牧師

お元気で過ごしてはいかがでしょうか。他の地域では、礼拝を始めたという教会もあります。この埼玉県も、間もなく自粛が緩和されるのではないかと。希望を持って歩んでいきたいと思っています。

ヨハネの黙示録を読み進めています。黙示録は、なかなかその内容を理解するのが難しいと言われていますが、読み解く一つの鍵となるのは、この著者であるヨハネさんが、どこにいて、この情景や幻を見ているのかということに注目していくと、全体の流れが良くわかると言われています。

例えばその良い例が、今日の聖書の箇所に出て参ります。ヨハネの黙示録第4章1節(457頁)お読みします。「その後、わたしが見ていると、見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラツパが響くようにわたしに語りかけるのが聞こえた、あの最初の声があった。『ここへ上って来い。この後必ず起こることをあなたに示そう。』わたしは、たちまち“霊”に満たされた。すると、見よ、天に玉座が設けられていて、その玉座の上に座っている方がおられた。」

<天が開けた>そして、その天から大きな声が響いてきて、「ここへ上って来い」ということは、この天のことですよ。天に来なさいということです。もちろんヨハネが自分で天に上っていくことはできませんから、霊に満たされて、2節にあるように、その霊が天へと彼を運んで行ったということでしょう。そして、その天上での様子をヨハネはそこで垣間見ることができたというのがこの4章ですよ。ということは、逆に申しますと、これまでの、3章までのヨハネは地上に居たんだということがわかるわけです。これは当たり前だと思われるかも知れませんが、実は大事なことを私たちに示してくれています。もう一度遡って、ヨハネの黙示録第1章9節(452頁)を見ていただきたい。「わたしは、あなたがたの兄弟であり、共にイエスと結ばれて、その苦難、支配、忍耐にあずかっているヨハネである。わたしは、神の言葉とイエスの証しのゆえに、パトモスと呼ばれる島にいた。」伝道して迫害を受けて、パトモス、これは牢屋がある島だったんですけど、牢獄島と言いますか、そこに捕らわれの身となっていました。10節「ある主の日のこと、わたしは“霊”に満たされていたが、後ろの方でラツパのように響く大声を聞いた。その声はこう言った。『あなたの見ていることを巻物に書いて、エフェソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオデアキアの七つの教会に送れ。』」地上に居たんです。そして、地上で霊に包まれて、そしていわば後ろから声があって、今あなたが見ていることを7つの教会に書き送れと言って、そしてこれ以降、エフェソ・スミルナ7つの教会にイエスさまがおっしゃる言葉を手紙としてしたためていく。従って、これは現実に存在していた地上の教会についての言葉だということが分かりますね。現実の地上の教会の有様。だから、我々も読んできて、ああ、私たちにも通じる教会の姿だと思われたかと思っています。

ところが、今日の4章からは違うんだと。地上の話じゃなくなるんです。ヨハネは天に上げられるんです。<上って来い>そして、天上で見たこと、霊によって天に移されて天上で見たことをこれから語り、証言をしていくんだということなんですよ。このあと4章から16章の最後まで、天上でのヨハネが見聞きしたこと、また見せられたこれからのことについて、彼の言葉として語っていくのが16章の最後まであります。そして次にヨハネの立っている場所、居る場所が変わるのが17

章 1 節なんですね。読んでみましょう。471 頁。「さて、七つの鉢を持つ七人の天使の一人が来て、わたしに語りかけた。『ここへ来なさい。多くの水の上に座している大淫婦に対する裁きを見せよう。地上の王たちは、この女とみだらなことをし、地上に住む人々は、この女のみだらな行いのぶどう酒に酔ってしまった。』そして、この天使は“霊”に満たされたわたしを荒れ野に連れて行った。」今度は、荒れ野に彼は連れて行かれるんです。そこで、見聞きしたことを新たに書き留めていくことになるわけですね。何で荒れ野？荒れ野って何だ？またこの時になったらご紹介しますね。これもとっても面白いんですけども、最もここまで続けられるかという問題がございまして、大丈夫かなと私も思いますが、がんばります。がんばりたいと思っています。

いずれにせよ、黙示録というのは、ヨハネが恍惚状態になって、トランス状態みたいになって、思いつくまま勝手に荒唐無稽な話を語ったという事ではなくて、ちゃんと冷静に秩序立てて、今この場所で、このことと教えられたこと、示されたことを、ちゃんとこれを冷静に書き記しているというのが、ヨハネの黙示録なんですね。従って今日から始まる、4 章から始まるこのこと、特に 4 章と 5 章は天上の礼拝という題が付けられています、天での御国の様子ですね。そのことを私たちに教えてくれているんです。それで、天で何をしているのか。天上でヨハネが見せられたことですよ。天上で何をしているのか。もう少し言い方を替えるならば、天の御国はどんな所か。それをヨハネは<ここに来て>と言われて、天上を見せられるわけですね。

天の御国はどんなところかと言う時に、ヨハネがここで私たちに教えてくれている、示していることは、先ほど申しました<天上の礼拝>という題がありますように、天は礼拝をしているところだということなんです。その天は、まさに神様を天におられる神様を礼拝している場所。それが天だよというのが、ここでヨハネが示されているところなんですね。一部の解説者の中には、これも未来の事だと解説する人がいます。確かにこの 4 章 1 節には、「『ここへ上って来い。この後必ず起こることをあなたに示そう。』」と、<この後必ず起こること>これは未来の事ですね。終末のことです。最後の審判も含めて、これから起こることを、未来の事を、預言を、教えようということになっていますから、この天上の礼拝も、これも未来にこうなるんだと読まれる方もおられます。実際読んでいけば分かりますが、終末の出来事というのは 6 章から始まるんですね。具体的には 6 章から未来の事が語られてまいります。

4 章と 5 章は何かというと、<ここに来て>と言われて、ヨハネが天にあげられて、天上での今、現在ですよ。今、現在天上でどんなことが行われているかということ、ヨハネが見聞きして私たちに教えてくれているのが、4 章 5 章だと考えていただいて良いのではないかと思いますね。

<天に上って来い>と神様が言われて、天に上った時に天では何が行われていたのか。そこでは、何より礼拝が行われていました。そしてその礼拝は、こんな礼拝でしたよというのが、4 章 5 章でヨハネが私たちに教えてくれている事なんです。そしてその後 6 章から、これから起こることを示そうと、実際にこれから起こること、未来の事が示されていくのが 6 章以下だと考えていただいて良いのではないかと思います。どうでしょうか。<天国>と聞きますと、私たちは、それは樂園だとどこかで思いますよね。余談になりますが、歌謡曲で「帰ってきた酔っ払い」という古いですね。若い人は全然知らないと思いますが、そういう歌がありまして、♪天国良いとこ一度はおいで♪天国はいいところだって言うんですね。何がいいところか。♪酒はうまいし、姉ちゃんはきれいだよ♪そういう風に歌ってる歌があって、つまり、何も仕事もなくて一日中楽しく遊んで暮らせるのが、天国のイメージだと。確かにそういうところがあって、そうだったらいいなと、私も思わなくもない部分もあるんですけども、しかし、ヨハネは違うよとここで教えてくれているんです。

天国というのは、そんな樂園ではなくて、天国というのは、礼拝が捧げられている場所なんだよと教えてくれているのが、この 4 章からなんです。言い換えれば、天の御国に行ったならば、その天で行われている礼拝に参加するんだ。そういう祝福に満ちた、そういう時・場所が備えられているんだよというのが、ここでメッセージとして私たちにヨハネから伝えられている事ではないでしょうか。まさに、天の御国に行けば、心置きなくすべて満たされて、それこそヨハネと同じように聖霊に満たされて、神様を礼拝できることで、本当に満足できる。喜びに満ち溢れた、そういう場所・時間を持つことが出来るんだよということです。どうでしょうか。

今私どもは、新型コロナウイルスの予防に対して、国や県からの自粛要請に従って、皆が集まる礼拝を止めているわけなんですけれども、そこで改めて多くの方々がおっしゃるのは、礼拝に行くことができていた時間がとても大切な時だったんだと。皆で思い切り讚美ができる。それは本当に良き時だったんだと。当たり前だと思っていた。でもそうじゃなかったと教えられています。だから、待ち遠しいですという声を、良く聴いています。ある意味では、私たちが地上に生きている限り、今回のように礼拝そのものの妨げを受けると申しますか、礼拝はするな、自粛しろという風になることがあるわけですね。でも、天の御国においては、本当に心置きなく、心も体も満たされて、それだけで礼拝を捧げている、赦される、そういう時間・場所が与えられる。逆にいうならば、心置きなく礼拝をするということが、あまり気に入らない。神様を礼拝するなんてとんでもないと、もし思っている人がいるならば、それは同じ天の御国に行った時には、その人にとっては逆に言えば地獄になるかもしれませんね。何でこんなことしなきゃいけないのか。同じ場所に行くにも、それを

素晴らしい時だと思ふ人もいれば、何だと、どうしてと思ふ者もいるということではないでしょうか。礼拝を捧げるということが、本当に喜びであると、そう思える者でありたいなあ、そう思います。

そして、次にこの礼拝の中心には何があるのかというと、2節3節ですね。「わたしは、たちまち“霊”に満たされた。すると、見よ、天に玉座が設けられていて、その玉座の上に座っている方がおられた。その方は、碧玉や赤めのうのようであり、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた。」何といっても、礼拝の中心は玉座に座っておられるお方、主なる神様。この方を讃美する、それが礼拝だということですよ。玉座を中心に、その周りにたくさんの者たちがいて、それが玉座にある方を讃美しているんだというんですね。ここで凄いのは、玉座に座っておられる神様を、どんな方であったかということ、ヨハネはここに記しているんですね。神様はどんな形・姿をしておられたのか。それは、「碧玉や赤めのうのようであり、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた。」と、これはヨハネがまさに目撃したことをここで記しているわけですよ。

この<碧玉>という宝石は、昔から英語では<ジャスパー jasper >という風に訳されています。でも、<ジャスパー>というのはどうも鈍いくすんだ石で、神様が鈍いくすんだ石というイメージを私たちはあまり持たないと思うんですけれども、元々のギリシャ語では、<イアスピス>という言葉が原文です。もちろん<碧玉>とも訳さる場合もありますが、<宝石の中の宝石>という意味です。同じ黙示録21章11節では、「その輝きは、最高の宝石のようであり、透き通った碧玉のようであった。」そう書かれているように、最高の宝石なんだと。透き通った<イアスピス>のようだと、出てきます。もちろん新共同訳はそこを<碧玉>と訳しているんですけれども、聖書の動物や植物、鉱物、作物などを研究されている解説者によると、これは、現代で言えばダイヤモンドのことだと言ってるんですね。つまり最高の輝き、宝石の中の宝石。最も輝いている、そういう輝きを表しているのが、この<イアスピス>だという言葉だと解説をしています。なるほどなと思いました。

それだけではなくて、もう一つ<赤めのう>、これも面白いので、ギリシャ語では<サルディオン>と言います。これは、サルディスという土地があってそこで採れるから、サルディスの石という意味もあります。もう一つの意味では、サルクスつまり、赤い、血の色から来ている意味もあると言われています。つまり、血が通っているといいますが、単にダイヤモンドのような光輝きだけでなく、そこに赤い血が通って、温かさや生きておられることの表現ではないだろうかと言われていました。面白いですね。このように、黙示録というのは、ヨハネが見た、与えられた、見させられた光景・風景を、彼のイメージで私どもに一生懸命伝えようとしてくれているわけですね。ですから、このように譬えられている物とか言葉というのは、彼が譬えようとした意味が一つ一つに込められているんです

ね。だから、ここでも玉座に座っていらっしゃる方は、ダイヤモンドや赤めのうのようだった場合、宝石でできているのかという事ではなくて、ダイヤモンドのような最高の輝きであっても決して冷たくはないのだ。血の通ったような温かさ、輝きを持っておられる方、それが神様なんだということ。を伝えようとしていると言ってるのではないかと思います。そして、その玉座の周りには、エメラルドのような虹が輝いていたんだと。虹というのは、これも一つの象徴しているものですね。創世記、ノアの箱舟の時に洪水が収まった後に、これからは神様が、この地上に平和をもたらすと約束・契約をしてくださった。その契約・約束の徴が、虹を世界にかけてくださった。この虹を見たら神様がこの世界を平和に、祝福をもって臨んでいらっしゃる。そう考えていいんだよというのが出て参ります。だから、虹は平和の象徴であります。あるいはノアの箱舟でいうならば、鳩とかオリーブの枝をくわえた鳩なども、平和の象徴として後々用いられていくようになります。虹も、神様の周りに虹があったということは、あのノアの箱舟の虹と同じで、決して裁きや厳しい方ではなくて、平和を望んでおられる。神様の周りに真の平和があるといってもいいかもしれません。しかもこれ、エメラルドのようだと。普通、虹は七色ですよ。エメラルドのようなどというのは、ギリシャ語の<スマラグディノース>という言葉なんですけれども、緑色の玉(ぎよく)という意味ですね。透き通った緑色なんです。一色なんです。その虹は、七色ではなくて、エメラルドのように透き通った薄い緑の虹が、玉座の周りをスーッと囲んでたというんですね。しかも解説者の中には、この虹は一つの輪っかだと言っている人もいます。地上にかかる場合は、多くは半円です。時々、丸く太陽の周りが虹になったりする場合、円になったりしますけれども。この場合は、柔らかな緑の輪が、光の輪っかなんだ。光輪ですね。光の輪っかに玉座が包まれている。これはまさに、ある解説者によると、この緑というのは、神様の慈愛・慈しみ・慈悲を表すのだという風に言っておりますし、緑、グリーンというのは平和ですよ。鋭い赤とか、そういうのではないのではないかと。やはり平和、光輪に包まれておられるだということですね。イメージできる様子ではないでしょうか。どうでしょうか。

このように、一つ一つ説明をしていきますと、時間がいくらあっても足らなくなるんですけれども、それぞれの言葉に意味が、メッセージが込められていると言えるのではないのでしょうか。考えてみますれば、ヨハネに<天に上って来い>と、そして<天にあるものを見よ>と言われて、イエスさまがヨハネに見せたかったものは何よりも目にしたもので、つまり天の玉座を見せようとなさったということですよ。まず<天に上って来い>と、そして<天の玉座を見よ>と、そう言われたということです。ここに大事なメッセージが何よりも込められているように思います。というのは、このヨハネたちが、ヨハネの黙示録を書いた時代のクリスチャンたちが置かれていた状況というのは、ローマ皇

帝ドミティアヌスが支配していた時代です。それまでのローマ皇帝は、死んでから神々の一人として祀られたということもあるんですけども、生前から神の子として拝めと言ったのは、ほとんどあまりいなかった。例外は、カリギュラと呼ばれた皇帝ガイウスがそのことを要求したということが残っています。しかしこのドミティアヌスは、自らを古代ローマの守護神ユピテルの子ども、御子、神の子なんだと自ら主張して、生前の自分を神様として礼拝しろという風に、明確にローマ帝国内の住民に皇帝礼拝を強要したんです。そして参加を義務付けて、この命令に従わない者は、牢屋に捕えて、牢屋に入れたんですね。従って、このヨハネも皇帝礼拝を拒否した罪で、牢屋に入れている可能性もあるんですね。つまり、当時の地上の世界は、ローマの玉座が支配していたんです。ローマの玉座が、ローマ帝国一帯を支配していた。ローマ皇帝が、君臨をしていたんですね。我がもの顔に世界を支配していたんです。それに対して、いや、天においては、真に天においては、この天と地上も含めて、天の玉座こそ真の支配者、導き手がおられるのだ。そこに座っておられるのはローマ皇帝ではなくて、主なる神様その方なんだ。まさに、天へと目を向けよう。地上では、おごり高ぶっている、人間がおごり高ぶって自分を天の子だと。ユピテルの御子だと言って拝めという。しかしそれは、真の玉座ではないのだと。本当の玉座は天にあって、その天の玉座がすべてを、天も地も支配しておられるのだと。いくら地上で権力者や独裁者が、わがままに武力で人々を支配しようとも、たかが地上の玉座に過ぎないではないか。天には、天の玉座、全てのことを支配される天の玉座、そしてそこに座っておられる主は、光輝く。そして真に血の通った、生きておられる。そして、平和と慈しみをもって深い方がそこにおられるのだ。その方に目を向けよう。また、その方に祈り求めよう。どうでしょうか。

何よりも最初に<上って来い>と、そのヨハネに<見よ>と示されたものは<天の玉座>ですよ。<天の玉座に目を注げ>と、これはヨハネを通して地上の迫害の中にあるクリスチャンたちに対して、天の玉座はしっかりとあるよ。そして私たちは、この地上での苦しみや厳しさがある。でもいつか天の御国に行った時に、天の玉座で心置きなく、誰の妨げもなく、他の神々を拝めと強要され要請されることもなく、真の主なる神様を、ただ一人を本当に心置きなく讃美できる、その喜びの時が待っているんだよ。与えられているんだよと、そのことを思いながら、天を見上げながら、天上の礼拝を思い浮かべながら、今地上でしっかりと生きていって欲しいというメッセージですよ。そういうメッセージがここに込められていたのではないかと。まさに、ヨハネを通して主なる神様が、当時のクリスチャンたちに示そうとなさったのだと思います。それは、私たちへの同じメッセージだと思います。地上の礼拝は限界がある。しかし、天上の礼拝を思いながら、この地上の礼拝をすべき

ではないか。今、我々の礼拝も、国家が自肅を要請しております。しかし私たちが自肅しているのは、国が要請するから、国が命じるからこの礼拝を自肅しているわけではありません。主が、天が、私たちに今一度立ち止まって、この時立ち止まって良く考えてごらんと、今は天が私たちに立ち止まる時を与えておられる。そう信じるから我々はこの礼拝を今しばらく自肅しているのではないのでしょうか。もし、神様が礼拝しなさいと、国がどうであれ地上の玉座に関わらず、国家が反対しようとも、私どもは主のご命令であるならば、この地で讃美の声を上げるのではないのでしょうか。そのことを改めて思わせられる聖書の箇所でした。

お祈りをします。

父なる御神様、依然として混迷の中にある私たち。

どうぞ主よ、この日本、この世界を、この状況を、主よ、憐れんでくださいますように。

どうか私たちがこの地で、あなたの御名を讃美する礼拝が、
良き形、あなたに喜ばれる礼拝として捧げられますようにお導きください。

いろんな状況や、いろんなことを考えなければいけない状況にあります。

どうか主よ、それぞれの置かれている状況、家族や仕事場、いろんな事柄を支え守ってください。

それぞれの中で、闘っておられる方がおられます。

特に医療関係者、介護にあたってらっしゃる方々、

そして自肅の中でも働かなければならないような状況にある方々、

あるいは家で自肅しながら本当に悶々としておられる方々にも、

あなたが力を与え、支えを与えてくださいますように。

そして、病に怯えておられる方々を、主よ、力づけ、

その中で特に孤独になってしまっておられる方々に、力と支えを与え、天からあなたがおられる

天において、あなたが私たちを見て、力と聖霊と支えとを与えてくださっていることに、

再び目を向けながら、今ひとりぼっちではないということを互いに支え合い、

励まし合いながら今の時を過ごすことができますように。

そして、いつか共々に集まり、心置きなくこの礼拝堂で

讃美の声を上げる時が与えられますようにお導きください。

この時を感謝しながら、このお祈り、主イエスの御名によっておささげ致します。アーメン